
秋田大学における献腎移植登録者への看護スタッフの関わり方 —「集い」とガイドブック配布の実施—

樋渡奈々子、梁田智子、保科恵子、熊谷ナミ子、
飯沼昌宏*、土谷順彦*、佐藤 滋*、加藤哲郎*

秋田大学医学部附属病院 二階西病棟、秋田大学医学部 泌尿器科*

<はじめに>

当院を希望施設とする献腎移植登録者は、平成10年1月の1名から平成13年7月には67名に急増した。しかし、大多数の登録者は他施設の透析患者であり、登録時に初めて当院を受診し移植医から説明を受けるのみで、看護スタッフとの関わりが薄かった。登録者は移植施設との関わりが無いことから不安や疑問があるのではないかと考えられ、私達はこれに対し看護スタッフとしてどのような対応をすべきか検討していた。今回、移植医の企画で「献腎移植希望者の集い」が平成13年4月に開催された。そこで私たちは登録者への支援策を検討するため、移植に対する不安や疑問を事前にアンケート調査し、「集い」の場でそれに答えた。このアンケート調査から、現在登録者に配付されている秋田県臓器移植推進協会のガイドブックの不足な点を見出したため、当院独自のガイドブック（以下ガイドブックとする）を作成し、「集い」の後に全登録者へ配布した。私達は「集い」の開催とガイドブック配布を通して、登録者の不安を解消するため、看護スタッフとしての効果的な関わり方を検討した。

<Ⅰ. 研究目的>

「集い」の開催とガイドブック配布終了後、登録者の疑問や不安が軽減されたかをアンケート調査し、今後の支援方法を検討する。

<Ⅱ. 研究方法>

1. 期間 平成13年7月1日から7月31日
2. 対象 平成13年7月現在、当院を献腎移植希望施設として登録している患者67名
3. 方法 ガイドブックを作成し郵送すると同時に独自に作成した質問用紙も郵送。無記名の自記式調査票による調査を施行。

<Ⅲ. 結果>

1. アンケート回収率64%（67名中43名）
2. 回答者の背景

献腎移植に関する情報はどこから得ているかの問い（複数回答）には、透析施設の医師や看護婦と答えた方28名、当院の移植専門医7名、移植コーディネーター6名、移植経験者9名、その他として4名がインターネットや新聞、全腎協の会報などと答えている（図1）。精神的な支え

は誰かの問いには、家族が24名、透析施設の医師や看護婦3名、当院の移植専門医2名、自分自身2名であった。

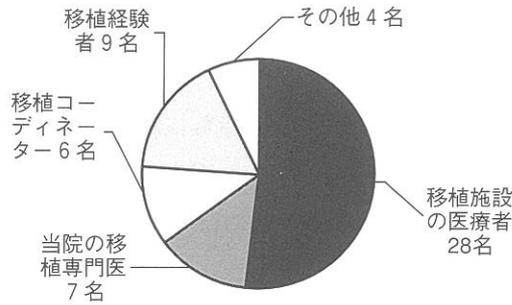


図1 献腎移植に関する情報源（複数回答）

3. ガイドブックに関して

1) ガイドブックの内容は理解できたかの問いに1名があまり理解できなかったと答え、その理解できなかった点は「免疫抑制剤について」であった。

2) ガイドブックを読んだの疑問や他に知りたい点を自由記載してもらったところ、「移植等の手順や一般論等しか載っていない。もっと細かな配慮ある情報が欲しい。体験談や実話を聞くと、ガイドブック通りにすんなりいったケースは少ない」「移植後の生活について移植者の経験に基づいた話し合いの場がほしい」「移植施設から遠いため、連絡後手術に間に合うだろうか。不便な所に住んでいる者にどれ位の可能性があるか教えて欲しい」「ステロイドの使用について」「費用と福祉制度についてもっと知りたい」「無職のため移植の費用が心配」「普段から白血球が2000台と少ないため副作用が心配。今以上に減少し益々感染しやすくなるのか」「生体腎移植の希望もあるが、相手の傷があまり大きくなるので決心がつかない」などの疑問が寄せられた。

3) ガイドブックを読む前の献腎移植に対する気持ち（複数回答）では「不安はない、平常心だ」「早く移植を受けたい」「体力のあるうちに移植する機会があれば良い」等、前向きな内容だけの方が17名。一方、早く移植は受けたいものの「期待感が薄れ、あきらめの気持ちがある」「年齢的なことで不安がある」「移植後のことが心配」など前向きな内容と不安の両方を示した方が15名、「不安でいっぱい、いざきたらどうしようと思う」など、不安を示す内容だけだった方が11名であった（図2）。

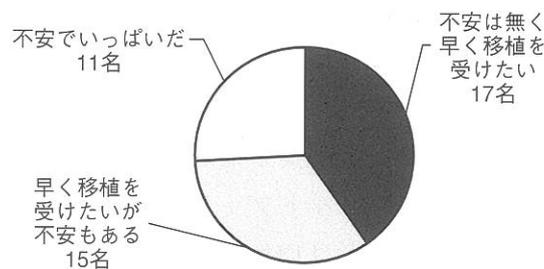


図2 献腎移植に対する気持ち

4) ガイドブックを読んだ後の気持ちの変化の問いには、「移植に対する不安が和らいだ」5名、「移植に対する期待が増した」5名、「移植に対する不安が強くなった」6名、「特に変わったことは無い」22名、無回答5名であった(図3)。移植に対して前向きな答えだけだった方17名中、不安が和らいだり期待が増したのは5名、気持ちに変化のなかったのは11名、無回答1名だった。しかし、早く移植は受けたいが不安のある方15名中、不安が和らいだり期待が増したのは4名、反対に不安が強くなったのは3名で、気持ちに変化の無かったのは7名、無回答1名だった。また、不安を示す内容だけだった方11名中、不安が和らいだのは1名のみ、反対に不安が強くなったのは3名で、気持ちに変化の無かったのは4名、無回答3名だった。

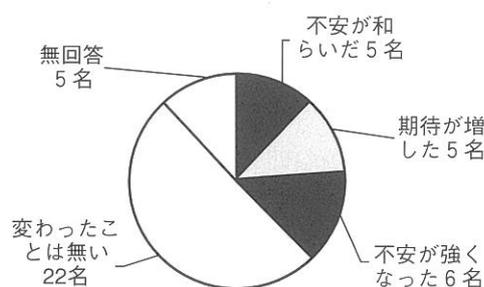


図3 ガイドブックを見た後の気持ちの変化

4. 「集い」に関して

1) 「集い」への参加者は、登録者67名中18名(27%)と、その家族8名。アンケートを回収できた43名中、「集い」に参加した方は13名だった。

2) 参加した感想は、「参加して良かった」10名、「参加しない方が良かった」0名、「どちらも言えない」3名だった。

3) 参加して良かった理由は「献腎移植に関する情報を得ることができた」8名、「移植に対する希望が持てた」1名、その他「同行した妻の移植に対する理解が深まった」と答えた方が1名だった。

< IV. 考察 >

ガイドブックを読んだ後の気持ちの変化を見ると、不安が和らいだり期待が増した方は10名みられた。その10名のガイドブックを読む前の気持ちは、移植に前向きな方5名、早く移植は受けたいものの不安があるという方が4名、不安を示す内容だけだった方が1名だった。しかし反面、早く移植は受けたいものの不安があるという15名中3名と、不安を示す内容だけだった11名中3名は、不安が強くなったと答えている。このことからガイドブックだけでは、移植に前向きな方はその気持ちを助長させることができるが、不安を抱えている方はそれを増強させてしまうこともあると言える。一方的な情報提供であるガイドブックだけでは意欲向上につながりにくいと考えられた。登録者67名中「集い」への参加者は18名と少なかったことから、移植施設からの情報が多くの方に提供できなかった。しかし、アンケートに答えた13名中、参加して良かったと答えた方は10名もいた。良かった理由として8名は「献腎移植に関する情報が得られた」と答えてい

る。移植に関する情報は、透析施設の医師や看護婦から得ている方が多かった。「集い」で移植施設である当院の医師や看護婦、移植経験者から直接話を聞く事は、正確な情報が得られ、満足がいくものであったと考えられる。また、「集い」の参加者には、登録者の家族が8名いた。アンケートに「妻の移植に対する理解が深まった」という記述もあり、登録者だけではなく、家族の参加も重要と思われる。登録者は精神的支えとして家族と答えた方が多くいた。登録者と家族が腎移植についての情報を共有することは、移植に対する理解が深まり、家族はさらに力強い支えとなる。そのためにも集いは、登録者が家族と一緒に参加できるよう配慮しなければならないと考える。

ガイドブックを読んだでの自由記載では「一般論しか載っていない、もっと細やかな配慮ある情報が欲しい」「移植後の生活について移植者の経験に基づいた話し合いの場が欲しい」などの意見があった。当院では生体腎移植を受ける患者の術前、不安の軽減を図るため移植後社会復帰している患者との面談を実施し、効果が得られている。同様に、待機者が移植経験者と不安や悩みを自由に話し合うことは、不安の軽減を図ることができ、移植への意欲向上につながると考えられる。「集い」は登録者、医療スタッフ、移植経験者の3者がそれぞれの立場で話し、理解し合える貴重な場となりえる。

以上より、一方的な情報提供であるガイドブックだけに頼らず、多くの登録者が「集い」へ参加するよう働きかけなければならない。それには看護スタッフも主体的に「集い」を企画、参加するといった方法で関わり、支援していくことが必要である。また、登録者が「集い」に参加されなかった場合でも、参加者と同様に情報が充足されることが重要である。そのための情報提供の方法を今後検討していきたいと考える。

< V. 結論 >

1. ガイドブックは、移植に前向きな方はその気持ちを助長させることができるが、不安を抱えている方はそれを増強させてしまうことがある。
2. 「集い」は移植への意欲向上と不安解消に効果的であったが、参加者が少なかった。
3. 「集い」に看護スタッフも主体的に企画参加し、多くの登録者が参加できるように考えていかなければならない。

参 考 文 献

- 1) 河原 泉他：腎移植術前における移植待機患者と経験者の面談の確立に向けて、第32回日本腎移植臨床研究会、1999
- 2) 小山内祥他：腎移植登録者の指導について、東北腎不全研究会誌、2000